

續「内村鑑三と新島襄」

オーテス・ケーリ

先に故魚木教授がこの誌上(第二十八卷第一號)に「内村鑑三と新島襄」と題する論文を發表された。魚木教授なき今、先生がなされるであつたらう發表を先生にかわつてこころみるにあたつて、あえて「續『内村鑑三と新島襄』」となづけたい。先生が私のこころみを喜んで下さることを祈る次第である。

近代日本では、他の方法では測ることの出来ない對人關係や思想の傳達の問題を説明するにあつて、先生・弟子の關係がすぐ引合いに出される様になつて來た。これは又、内村鑑三をめぐる人間關係を説明する場合にも、――近代日本の指導者の極めて注目すべき一團の中には、學生時代に彼の直接の弟子に教えられたものが多い故に――重んじられる方法である。この意味で、内村の新島襄に對する最後の手紙が、「私の敬愛する先生 My Dear Sensei:」と云う敬辭で始まつているのが一きわ目だつのである。

内村と新島は同時代の人とみなされ、最近では共に近代日本の精神的指導者とされて來ているが、新島は年令及び海外留學の時期からみれば、やはり殆ど一代先輩であつた。しかし残つてゐる資料からは、内村がどの程度まで新島にたよつていたかをはつきり知ることにはむづかしい。年令のこの相違(十八才)にもかかわらず、彼等はお互に友人と見做し合つてゐた。しかし内村がエルウィンで、(ハーヴァード大學で政治經濟學を勉強するよりも、或いはペンシルヴェニア大學で自然科學の研究を更に進めるよりも)、アーモスト大學には入らうと決心し、又「神『キリスト・イエス』」

由テ上へ召テ賜フ所」には入ろうと決心した一八八五年の彼の偉大なる決斷の夏——彼の「發育時期」の絶頂期——には、特に、新島の強い指導と同情とにたよつたといふことは少なくとも言えるであろう。一八八五年夏に内村がいかにも悩んだか、又これに新島がいかにあずかつたかの全貌はもつと研究さるべき問題である。

それはさておき、この内村の新島に對する最後の書翰は、内村が獨立傳道者及び自由寄稿のジャーナリストとして眞の召命をうけるまでの多くの教職の中での最初のものであつた新潟の北越學館からの便りであつたのである。彼はこの手紙を書くおよそ七週間前からその仕事についており、そこには彼が教頭 (Superintendent, President, President-elect) の職につく以前にも新島の助言を求めたことがあることが示されている。内村は、「私がここに來ることを決心するに際し、どんなに氣が進まなかつたかは御存知の通り……」といつてゐる。

新潟におけるキリスト教活動の歴史は興味あるものであり、一八六九年、S・R・ブラウン博士夫妻及びマリー・キグー嬢 (Dr. and Mrs. S. R. Brown and Miss Mary Kidder) の到着と共に始まつたものである。彼らは一年足らずしか新潟に滞在しなかつたが、一人の良家の青年アベ・キンジロウを横濱へ一緒に連れて歸つた。彼はブラウン博士の下で三年學んだ後、東京の大學で三年間學んだ。ここで彼は、ミルとスペンサーの思想を充分に受け入れ、新潟へ歸つた。彼はその理想のもとに同郷の人々を啓蒙しようとおもつてゐた。一八七五年エディンバラ醫療傳道團のテオバルト・A・バーム博士夫妻が新潟に到着し、傳道と醫療活動を始めた。アベは始めは官吏として、次に官立學校の教師として活躍したが、「民衆の大學」(People's University) の設立を欲してやまなかつた。彼は趣意書を作成し、一萬圓の寄附を集めようとかかつたが、何の反應もなかつた。そこで彼は一八八四年に、二名の助手と十七名の生徒で彼の學校を發足させた。

「彼はこの頃自由について研究してゐる中にだんだん、聖書的キリスト教が眞の自由の基礎であらねばならないと

いう結論に達した。一旦こう確信すると、彼はただちに在留宣教師に彼の學校で英語を教え、そして生徒達にキリスト教を教え込むことを依頼した。最初は彼の依頼の前半のみが應じられたが、しかし新約聖書がナルセ氏と在留宣教師によつて自分自身や、友人達や、生徒達に説明されることを繰返し望む彼のたつての願ひを受け入れて、ナルセ氏と在留宣教師はそれ以來彼の學校で隔週の聖書研究會を續けて來た。こういう狀況から、キリストを彼個人の救主として受け入れ、全面的にキリストに身をまかすところまで行くのは容易であつた。ところで長い間高慢な特權階級の蹂りんの下におかれていた民衆に、自由を教える學校を設立しようとする彼のそれまでの目的は、眞の自由の源、即ちキリストの眞理を基礎とする「民衆の大學」(People's University)を他の人々と共に設立しようとする、尙氣高い決心へと移つて行つた。彼の最初の義務、並びに彼の妻の最初の義務は、自分達と二人の幼ない子供達を神に捧げることであつた。まことの忠誠心をもつて、彼は永久基金への第一歩として、百二十名の男生徒をもつ彼の學校と彼のこの世におけるすべての財産——つまり彼の學校の建物——を捧げたのである。そして彼は自分自身で指導したい氣持を全くすて、同志社の熊本バンドの一員を新しい……學校の教頭に迎えることに同意した⁽¹⁾。

相當の勢力と名聲とを持つた新潟縣縣會議員カトウ・カツヤは、一八八四年 R・H・デヴィス牧師 (Rev. R. H. Davis) によつて洗禮を受けていた。彼が東京に出ている時、アナポリス海軍兵學校出身の海軍大尉セラダ (Lieut. Serada) が彼に、越後にアメリカ風の大學が設立されるとの確信を抱かせた。

「アベ氏が自分の學校をこの縣でのキリスト教大學の基礎として提供しようとする決心をしたと知つた時、彼はこれを神の召命として歓迎し、そのよき事業を助けるべく飛んでいつた。これらの二人は、マッタ氏——ゴゼンの富裕なキリスト教徒であり、日本あるいは他のどこの國においても最も氣高い青年の一人——と共に確實な經營的基礎を持つ新しい大學設立の計畫を案出した。……これらの新たに興味を持つた人々が、キリスト教の學校がどんなもの

であるかを知る機会を持つ迄は、寄附の期待は餘り出来ないけれども。……有能な一人の日本人が招かれ、教頭という肩書で事實上の校長の地位を引受けることになつてゐる。カトウ氏は名義上の校長となるのである。⁽²⁾

「この學校は公式には、一八八七年十月十五日に開かれた。……この地方の最初のキリスト教の男子學校として、教師陣は次の人々から構成されてゐる。即ち、献身的で、自己犠牲的な校長アベ氏、校務以外に通譯として宣教師たちに得難い奉仕をなしてゐる同志社出身のナカシマ氏、以前はムラカミ私立學校で教えていた中國語の教師ヨグマ氏、數學の教師のカガミ氏、——彼の地位は彼が一月に辭任してから、新潟の公立學校の出身である山本氏によつて占められて來た。——である。H・M・スカダー博士(Dr. H. M. Scudder)、ドリムス・スカダー博士(Dr. Doremus Scudder)、グレイブス嬢(Miss Graves)、ニューウェル氏(Mr. Newell)、アルブレヒト氏(Mr. Albrecht)は外人教師である。しかしニューウェル氏は一年の大部分を長岡の學校でつくしたのであるが。課程は、豫科二年と大學四年を含んでゐる。……近來、帝國陸軍の元軍人によつて教えられる軍事教練が加えられて來た。H・M・スカダー博士は毎週「キリストの生涯」についての講義をなして來た。それは出缺隨意のものであつたけれども、學校の殆んど全員を集め得なかつたことはなかつた。……新しい教師が任命されることになつてゐる。交渉は既に完了し、そこで我々は、カレッヂの長として内村氏を獲得した。彼は、アメリカの大學を卒業した日本人の中で最も有能であり、且最も献身的な人である。この取り極めによつて、カトウ氏は校長の稱號を譲り渡して専任理事(Director)となるが、經營面の全支配權を握つたままとなる。……尙、この學校の内で、又學校を通して、なされた直接のキリスト教活動について語るものが残つてゐる。我々は單なる教師としてよりも、宣教師としてここに居ることを自覺してゐる。この學校のはつきりしたキリスト教的性格は、はじめから保證されて來た。この學校の『發起人』の半數以上と、『後援者』の十分の九以上は未だクリスチャンではないけれども、校則によつて、學校はキリストと聖書に固くむすばれ

ている。この學校は縣全體にあまねく、『キリスト教學校』として知られている。⁽³⁾

「……今年の學校の仕事は、日本人のクリスチャンの教師達や宣教師達の意圖していた確信とは反對の方向へ走つたところの校長候補〔内村〕の動きによつて、最も悲しいことに、最もひどく妨害された。友好的に交渉しても効果がなかつたので、日本人のクリスチャンの教師達や宣教師の教師達は遂にやむを得ず、満足な取り極めがなされるまで學校を缺席した。發起人達と教師達との間の意見の相違は、自然に生徒達にまで擴がつた。政治的な面も興奮を増し加え、學校は全く崩壞の瀬戸際まで来ていた。それから、十二月の終りになると、校長〔内村〕と、彼が自分の意見を支持させるために入れた教師達が辭任した。そして日本人のクリスチャンの教師達及び外人教師達は、再び彼らの仕事につく様勧められた。⁽⁴⁾」

この様に、この學校の起りと内村事件とについて、當時の新潟の傳道報告は記している。報告としてこれは確かに苛酷さを缺いているといわねばならない。そして内村の辭任は、この事件の最後の結果であつたけれども、彼がこの新島への手紙の一カ月後に、長年手紙のやりとりをしていたアメリカの友人 D・C・ベルにこのことを書き送つた時には、内村も案外激情的ではなかつた様だ。この學校を、「アーモストやオペリンとは全く違つた意味でのキリスト教的」學校だと書き記しながら、「そこでは私は、殆んど『宗教的形式』に加わらない。私は説教をしないが講義をすることになつてゐる。この點において、我々は京都の新島氏の學校やその他のものとは異なつてゐる。しかしながら、我々の仕事の方法の結果に私は非常に満足している。我々は生徒達が聖書を持つて來ることを決して強制しないし、説得さえもしないのである。……我々は普通のミツション・スクールの網から逃がれる魚を捕まえつつあるのだと私は見てゐる。⁽⁵⁾」

内村のこの言葉は、傳道報告と見まちがわれる位おだやかである。内村は新潟へ行く以前に、ベルにはつきりと自分

の意見を書いたことがあつた。

「御承知の通り、私の主義はキリスト教・國家的 (Christo-national) である。そしてキリスト教的でもなく、同時に國家的でもない我國のどの様な學校にも私は殆ど共感をおぼえないのである。……しかし私の考えは、それを全く獨立でなすことである。なんとすれば外國のミッションからのどの様な援助も、日本にある源からの援助と支持とを呼び起すのに極めて大きな障害であると私は信ずるからである。……財政的な面、又その他の面では私を神の御手にあづけておいて下さい。しかし、祈りなしに私をほつておく様なことはして下さるな。」⁽⁶⁾

この學校が崩壊してから數十年たつてからの印象は、内村も宣教師たちも同じ目標を追つていた様に見えるというところである。内村は眞に日本的でなかつた社會的動機に反對する反應において、確かに時代にはるかに先立つていた。カトウとユダマが「單に北〔越〕學館ではたらくために長老派教會から組合教會に移らねばならなかつた」という内村の非難は、本當だとすれば重大な問題である。しかしこれは未だ問題のままに残つてゐる。傳道報告はその内容においてだけでなく、かかれた調子からみても、この學校が眞に日本的な冒險であるという内村の信念と同様な氣持をあらわしている。内村の言葉では、北越學館は、「政府によつても又いかなるミッションによつても動かされる様なカレッヂではなく、全く國民によつて動かされるのである。」このディレンマは今尙非キリスト教文化の中ではたつきつつあるキリスト教勢力につきものである。非キリスト教的な大衆に、どの程度まで完全にキリスト教的な行爲を要求すべきであるか。内村は、日本人であつただけに、道徳的な大義名分をもつて積極的な役割をとることが出來た。一方、宣教師達には、彼等にもたらされたものをもつてはたらくという消極的な役割しか残されていなかつたのである。

この手紙の注目に價いするところは、内村の道徳的確信又は、彼のユーモアにある。彼の確信の幾分かは、確かに聖書の徹底した知識に基礎づけられたキリスト教の歴史の流れに對する關心からくるのである。この書翰では創世記から

の自然な引用が示している様に。尙彼が次の様に書く時、それは裁きを知つてゐるクリスチャンの確信として眞實に響くのである。「私は、我が國の人々の権利のために、かくもたたかうことを私に得させ給うた神に感謝の念を憶えるが、私が宣教師を立腹させ、「日本人の」追従者をふみつぶす様な時には、決してそれを喜んでしたのではなかつた。」彼のユーモアは彼が同藩の士族である新島に對し、「〔越後〕南西を攻撃する際に、東北の先頭に立つてであらう」と云うときとか、「彼は全くの『長州武士』である」といつてある日本人の追従者を皮肉くるときにあらわれる。又政府の援助を求めに行くクリスチャン等を、あの偉大なパウロ、アタナシウス、サヴォナローラの「弟子仲間 (fellow disciples)」と呼ぶのは内村獨特の皮肉であらう。

この手紙は、「東京麻布區仲ノ町二十三番地―栗津様内―新島襄殿行―緊要」と宛名されており、封筒の裏には、「新潟―北越學館内―内村鑑三」「十月廿日」と書かれている。又消印は、「越後―新潟―廿一年十月二十日―便」、「武蔵―東京―廿一年十月二十二日―便」、「山城―京都―廿一年十月二十五日―便」となつてゐる。以下は明治二十二年十月廿日に内村が新島にあてた手紙の原文そのままである。

Hokuyetzu Gakkwan,

Niigata, Japan.

Oct. 20, '88.

My Dear Sensei:

It is now almost two months since I came here. I have fought so many battles since that time that

the two months look like two long years. I am still fighting the same old battle, — that of genuine independence from the mission, and missionaries, — and I am now in the thicket of it. I was able to convert Mr. Kato to the independence view after hard preaching of some five weeks, and at least one of the founders has enough "Yamato spirit" to comprehend the import of this independence. Mr. Abe, our Kanji is trembling. Rev. Mr. Naruse is still indulging in his casuistry, vague in his views, foxy, and I must say, sycophantic. He is a genuine 長州武士. The bulk of the students is desirous to have foreigners, though they complain to me many things about them. The majority of the Founders and Friends of the school are perfectly indifferent. The idea that such should have been asked to sign their names as 發起人!!! Mr. Albrecht regards the letter which I sent to the founders defining the religious character of this school, and the incompatibility of employing the unpaid foreign labor with the principles with which the school was started, as "insinuations and insults" to the mission. He and Miss Cozad stopped to come to school since two days ago. The result which I have been long anticipating has come. Either missionaries must go, or I must go. The American missionaries and Uchimura Kanzo seem to be impossible to work together. The two are as distinct from each other as oil from water. I believe, however, I have done at least *one* service to my God and my country, by coming to Niigata. I delivered this school from being a slavish organ of the Mission and the Congregational Church here. The public was defrauded (I must confess) during the last academic year with regard to Hokuyetzu Gakkwan. They were told that it was school started for liberal education, only adopting the Christian morality as the *standard* of its

moral training. But in fact, it was changed to an institution from which the church members were to be recruited. Mr. Kato and Mr. Kodama (teacher in Chinese) had to be transferred to the Congregational Church from the Presbyterian Church for the mere sake of working in Hok. Gakwan. All the officers and teachers were members of Congreg. Church. The public is NOT to be blamed for their suspicion that H. Gak. is an organ of religious proselytism. I am afraid that the pure sons of Yamato are gradually adopting the Jesuistical casuistry [*sic*] when they became Christians. What they proclaim to the public is one thing, and what they really do is another. As for myself, I would very much more enter Noshomusho and be its officer, than to be the President of the school whose principle is openly violated, whose founders do not know this principle, and whose *reality* is *not* what its name indicates.

Have you heard anything about Mr. Koyano? or do you think of anybody else who can take up my position here? I will fight out all the disagreeable battles before I hand this school over to my successor; but both wisdom and prudence seem to require my resignation as soon as the school is restored to its right position. You know, how reluctant I was when I made up my mind to come here. While I feel thankful to my God that He hath enabled me to fight thus for the right of my countrymen I never have any delight in offending missionaries and crushing the sycophants. As I wrote you last, this shall be my last, the very last experience with the “信者”. I fail to find in them those noble Christian characters,—— as clear as mountain water, as pure as sea-breeze——which I can find among many of “未信者.” The soul that clings upon Jesus of Nazareth is ashamed to be identified with the popular 信者 of Japan.

I sincerely hope that no body in future will attempt to yoke me with missionaries and "missionaristic Christians".

I am quite lonely here. The school commands a fine view over the Shimanogawa and its fertile banks. The island of Sado is right behind me, and the sea is repeating its dolorous music most agreeably to the pensive souls. The students number 175. There are some fine stuffs among them. The people generally are honest, & lovers of liberty. Echigo has very hopeful future. It shall lead North East in its attack upon South West. Only we need spiritual 義信,——his courage and purity of character sanctified by the Spirit of Christ.

How about 耶穌教公許^①? As for myself I am one who claims that there is *no need* of 公許. We need some "flaming swords to keep the way of the tree of life"^② in order to guard the church from hypocrites and "socio-politico Christians". Already we had enough of them; and what would be the Japanese Christianity were it regarded as a public religion by the Government. Already, the fellow disciples of Paul, Athanasius and Savonarola began to call in the aid and influence of those in authority, and it is well nigh the time for us to look over the Church History once more, that we may learn wisdom from the failures of the past.

Very sincerely yours

in the service of Christ & Japan.

Kanzo Uchinura.

